こうした冬が、辛ふじて過ぎると、村の人々の顔には、ホッとした色が浮ぶ、そして未だ消えない雪をけつて、乘合馬車が威勢よくラツパを鳴らして來ると、もう村人は活動し始めるのだ。

其頃になると、灰色であつた空も處々青空が現れて來て、二三日の間には日光も何となく強く輝く樣に思はれると、もう空は全體が紺青となる、すると日本アルプスの連山の雪も麓の方から消えて來て、ついには嶺(イタダキ)にだけ雪が見られる樣になる、それから又二三日經つと、郵便脚夫は一冬中の書狀をまとめて、各戸にくばつて行く、と思ふとすぐ里の方—東から—商人は車に荷物を滿載して各戸を週りに來る、そして村人等に里の有樣を知らせて歩く、小川が水の音を立てて流れる樣になると、裏の山の枯水もだん〳〵と綠を帶びて來る、村人が瞳がれて居る東より流れる小川は、上流の方から青草の葉を浮ばせて來る、しばらくすると、小川の堤から青草におそわれて來て、すぐ村は綠を以て包まれる、またしばらく經(ヘ)ると、野の花が上流から小川によつて流されて來る、そして夏の近い事を村人に知らして行く、村人等は、これからの短かい活動期を、一生懸命に、數ケ月間の冬ごもりの事を考へながら働く、夏も過ぎると又秋が來る、そして、村の小川を紅葉で、飾つて居ると思ふ間に、又小供の「雪々」と云ふ聲で冬越をするのだ。私は氣候が良くなつて、村が綠に包まれる頃都會に歸つた、けれど私は、冬の來る度に、雪に閉された日本アルプスの連山の下の、寒村の冬越を想ひ起さない事は無い、私の心は常に、冬と共に寒村の冬を聯想するのだ。

去りし冬の日

神戸　津川清平

「あつちの山は日が照つて、こつちの山は日が照らん、照り〳〵坊主に言ふてやろ」といふ聲が寒い冬の日に横路ですることがある。私はそれを聞くと如何にも長閑な氣がする。さうして裏の山を眺めると、山の背を雲の影が走つて居て、インヂゴー色の空に白雲が飛むて行く。そんな時の山は色が脫け出たやうで、面白くないが、土埃りを上げる田舍路の景は、色が多くて、常なら暗く見える汚れた壁や農家の屋根が、見變るほど美しくなつて居る。後の森などが明かるい色の前景を一層明かるく見せて、紫の枯木がきび〳〵した影を地に落して居る。忘れた樣に冷い風が止むと、暖い光りがスケツチする肩をほつこり暖めて、「小春日和」と呟く。高い水車の樋には、白いツラヽが光つて居る、農家の子供が騷がしく集つて取つて居る。細い路傍の枯草にも暖い影が見える。

霧の多い朝雨戸を開けると、コバルト色に包まれて居る。それが日光で散つてしまつた後も、やはり陰の處々に殘つて居て、冬の朝といふ感じがして居る。

冬の雨は麗はしい。田舍路の草がびしよ〳〵と黃色く煙つて、エメラルドの大根畑、紫色の農家、それが皆雨に濕れて光澤が美しく出て居る。向ふの山は暗い紫を一面にかぶつて居る。

疊つた日の松林は高尙な色になつて居る。重い紫の多い陰が、

暗い綠と調和して、なか〳〵一寸したスケツチには畫けぬ。その松林の前に白い枯木が、ホワイトで拔いた樣によろよろと出て居ることもある。遠い東の山が夕日に映じた時は、如何にも冬の崇高な姿を感じる。

總て冬の復雜な色彩は、春夏秋の樣に日向には求められない。暖い色。それは或は得られないことは無いが、變化の多い色は陰及び影でなければ見られない。さうしてそれがより多く赤味を帶びた紫を含むで居る。

おのれの告白〔下〕

長谷川利行

おのれはここに謝罪せなくちやあならないことどもがある。

第一、栃木縣の人江西藤十君は去る七月おのれに眞面目に水彩畫を研究し習作し交換を爲やうと、自分の目下の境遇などまで御報せになつてワットマン九ッ切位の御自筆の畫を送られたことである、おのれは早速畫なり片紙なりを差上げるべきはづなりしも、未だ未だ人樣に見せる樣なるものは出來ないし、おのれではこれで十分と思つた作品もないので何時か出來たら出來たらと最早半年も經過して來た、出來たら多少おのれにもいいと思つたのが出來たら手紙もあげたい御返事をだしたいと思つて手紙は半年も前にいろ〳〵畫のことどもに就ておのれの意見やらを認めて置いたが今日に到つて其運びにならない過日ハガキを飛ばして置いたがおのれはここで言ふ例令眞面目に研究したり研究畫を作つたりして交換するに、人樣の樣にをうそれと御返事が出來かねるので、おのれの性分としてそれでも眞面目に研究はおこたり無いし研究した結果創畫も作つて居るが、どうもこれでいいと思つた畫なんぞは一年に一枚位か出來ない、勿論一寸としたいいところがあつてもこれを人に見せてこれがおのれの研究して出來た寫生であるなどと美しいばつかり自然の色彩に反してすましてゐる等といふことは嫌いである、おのれはこうも信じてゐる、いまに寫生をやつてもあまり自然の色彩と相違のない色を出して描いて見せる、そうしなくちやあ到底眞に美しい立派な畫は出來ないものだと信じて居るから、どうもおのれは江西君に申譯が無い次第である、出來たら御返事もするし畫もさしあげるをとしてあきらめて載きたい而して見込のない奴だ、畫家となつても藝術界に貢獻の出來る人間でないと罵られても結構です、おのれは先輩の意見も聞きおのれ自身もよく吟味して終日の研究に怠りのないをを告白して置く。

第二、おのれは昨年五月頃より肉筆の水彩畫ハガキの交換をやつて來た、本紙上でも廣告をしてもらつた位、この繪ハガキ交換もつくづくつまらむものだと信じた、やりつばなし筆や眞面目を缺いたもの、苟も本會の會友とでも言はれる人樣から、それらのものが舞ひ込んだので且つは驚き平向したのである、平向したと言ふのは返事を上げるのにどんなものを上げていいかためたふらのである、おのれもこれまでエハガキ等は馬鹿にしたものでやりばなしの不眞面目で押通して來たもの、これが普通の人なら知らず、又唯あつめるといふなら知らず、一體全體繪ハガキ交換は何にするためのものやら、おのれは侮辱された氣